四谷の千枚田だより

第 268 号

新春を愛でる

今年の干支は「丙午（ひのえ・うま）」で、十干（じっかん）の「丙（ひのえ）」と十二支の「午（うま）」を組み合わせて六十年に一度巡るパワフルな年です。丙も午も「陽の火」が最も強く活力や変革のエネルギーに満ち、決断が早く、物事が一気に動きだす「流れを変える力」を持っており、停滞を打ち破り、新しい挑戦に適した年とされています。

人の幸・不幸は干支では予測できませんが、皆さんには目の前の出来事に一喜一憂することなく、健康に留意しつつも充実した丙午の一年であることをお祈り申し上げます。

大般若 年中行事

正月四日、身平橋組（二十二戸）は海源寺で臨済宗方広寺派釣月寺の鎌田住職、副住職をお招きし大般若会の法要が実施された。

「大般若波羅蜜多経」は唐の三蔵法師のお一人であった玄奘三蔵（げんじょうさんぞう）が歩くこと三万キロを十七年の歳月に渡って、命がけでインドより唐の国にもって帰られた尊いお経で、その後四年間かけて翻訳された。その巻数は六百巻、字数は六億四千万字。この功徳に対して、目を通すだけでもご利益があり、文字を見るだけでもありがたいもので、檀家衆は昼食を早々と済ませ、お寺に保管された経典を一巻づつ神妙にめくり（風を通す・虫干し）収めた。

大般若波羅蜜多経転読とは一つの経典を全て通読する真読（しんどく）に対して、経題や経の主要な部分を拾い読むことをいい、僧侶が経巻をひもとき、一巻、一巻、転読するたびに、「大般若波羅蜜多経巻第（だいはんにゃはらみつたきょうかんだい）〇〇巻（一巻～第六百巻）、唐ノ三蔵法師玄奘奉詔訳（とうのさんぞうほうしげんじょうぶしょうやく）」と大声で唱えるお経は本堂内に響き渡る。最後には経巻をもって「降伏一切大魔最勝成就（こうぶくいっさいだいまさいしょうじょうじゅ）」と唱えながら経巻で経机をたたく。この作法は、「すべての災（わざわ）いや悪を祓（はら）いとり除き、人々の願いをかなえて幸せに導いてほしい」という意味の除災与楽（じょさいよらく）を祈る意味があり、新な年の始まりに集落安泰、家内安全、無病息災を祈願する身平橋組の慣習で文化として大切に継承されている。

門松

身平橋集落の海源寺では新たな年を迎える昔懐かしい門松が寺庄屋により、左右一体に祀られた。先人の祀りのしきたりの継承がみられ、安堵した。

獣害被害に泣く

今、中山間地域では獣害被害が頻発、農業のみならず住民の生活環境にも大きな変化をもたらしている。

奥三河を事例にシカ・イノシシ・サルによる被害が大きく、農作物では米、野菜、果樹、森林では木の枝葉や樹皮が食べ尽くされ、生態系や土壌流出、人身事故にも繋がり、農業・林業の衰退や耕作放棄地の増加を招く深刻な社会問題を招いていることは歪めない事実である。

主な害獣と内容

～独断と偏見で～

○ シカ：枝葉、樹皮、新芽（樹皮葉採食）は食べ尽くし、里地里山の下草も根こそぎ食べてしまい餌不足からか、強い毒性のある「しきみ」や舗装道路の日陰のコケ（キノコ状）も食べられた痕跡がみられる。昨年は稲穂を食べることを覚え、その被害が大きく発生した。

○ イノシシ：農作物を掘り返して食べたり、田んぼで「ぬたうち」、稲架の稲穂を食べるなど広範囲の被害が発生。

○ サル：農作物（果樹、野菜など）を食い尽くす。昨年は稲穂を食べる被害が発生。

被害の現状と影響

○ 農林業への影響：農作物の収穫減、耕作意欲の低下、離農・耕作放棄地の増加。

○ 生活環境への影響：田舎暮らしの年寄りは野菜も作れない土地にしがみつく生活に辟易（うんざり）している。野生動物の道路への飛び出しが原因の交通事故発生。

被害の背景

○生息数・分布域の拡大：シカやサル・イノシシの生息数・分布域が拡大している。

○ 食性の進化：個体数の拡大から餌不足が生じ、里地里山の自然食から人間の作った食用物の味を占め、御馳走とばかり食い漁るようになった。

○ 耕作放棄地の増加：何を作っても獣に食われてしまうことから必然的に耕作放棄地が拡大、新たな獣害の温床となる。

平成後期には四谷の千枚田でイノシシの被害がない家は「コメがよっぽど不味い」などと評げるほど被害が発生した。豚熱発症で個体数が減少傾向であったが、また、増えつつある。シカについては田んぼに入っても歩くだけであるから…と高を括くっていたが昨年は稲穂の味を占め、田んぼに入り食べたり、稲架の稲まで食べる被害が発生した。サルは過去には一群二十匹が、現在では五十匹と群が拡大し、果樹は勿論、畑のネギやニンニクなど人間の作るものはすべて食べ尽くされるし、家の軒の干し柿まで食べられてしまったなどとも聞く。我が家の田んぼにもサルの群れが侵入、稲穂の食害が大きく発生した。ちなみに我が家の田んぼを事例に、毎年七俵（四百二十kg）の収量があったが、今年はシカとサル、おまけにイノシシの被害から二俵半と十七kg（百三十七kg）と、泣くにも泣けない状況であった。こんな惨状の続く中、四谷の千枚田を、地域を守るため狩猟免許を持つ海老須山の夏目保夫さん、滝下栄一さんと私はこの一年間でシカ、イノシシなどの害獣をザっと三十頭余りの個体数を削減したが、まだまだ成果までには、ほど遠い。

つらつらと御託を並べたが、かつては南北設楽郡市町村レベルで新城町に次ぎ二番目に海老町を謳ったこの地も小・中学校も廃校、行政機関も農協もとうの昔に撤退。軽トラの燃料補給に往復二トルは消え失せ、箱物だけが彼方此方に残り、跡地が寂しい…。今は、子供の声もなく、聞こえるのはシカと若い衆（サル）の鳴き声だけだ。人と獣害被害、どう向き合っていくか、大きな課題である。…まぁ～ ポジティブ思考で行こう。

害獣と被害

発行　令和八年一月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責　小山舜二